

# 地中海沿岸の住居・集落・街

—ギリシャ・アテネ国立工科大学建築学部での在外研修報告その2—

## Houses, Villages and Towns on the Mediterranean Coast

Report on Overseas Training at the Department of Architecture, National Technical University of Athens, Greece

鎌田 誠史 武庫川女子大学 准教授

Seishi Kamata

Associate Professor, Mukogawa  
Women's University



図1 フィールド調査マップ（撮影：鎌田誠史）

### 研究調査の概要

#### はじめに

前掲の報告その1では、「エーゲ海・キクラデス諸島の歴史的な集住環境の空間構成と地域固有のエコロジカルな環境構築技術についての研究」をテーマに、キクラデス諸島の島嶼集落のフィールド調査について報告した。とくに本研修の対象であるエーゲ海のキクラデス諸島の固有性と日本の南西諸島との共通性について、今後の研究におけるテーマを発見できたことは今回の海外研修において大きな収穫であった。

私はエーゲ海の美しい海に浮かぶキクラデス諸島の集落のフィールド調査を重ねていくにつれ、さらなる興味が浮上していた。それはエーゲ海を理解するためには、それを包含するもっと大きな海域、つまり「地中海」の存在を無視することはできないということであった。エーゲ海はギリシャとトルコに囲まれた円環であり、ひとつの文化圏とまとまりを示していると言えるが、地中海は、様々な国に接した多様な文化圏が入り混じ

った壮大な世界である。先行研究によると、「地中海の取り巻く地域は、世界のなかでも、もっとも古い都市文明を今日まで受け継いできたところといえる。古代エジプトも、メソポタミアの文明も、その後の地中海世界の都市や建築のあり方に大きな影響を与えた。古典古代のギリシャ、そしてヘレニズム、あるいはフェニキア、その後ローマなど、古代の文明はいずれも高度に発達した市民生活のための都市を生み、気候風土に合う社会や家族のあり方に適した形態をつくりだした。」とされ、エーゲ海を理解するためには、この地中海を少しでも見ておく必要があると思い至った。

以上より、本研修ではギリシャを拠点にして、地中海に接する近隣諸国の美しい集落をフィールド調査したが、本報告ではその一環として巡った、地中海沿岸の住居・集落・街について紹介したい。

キーワード：地中海、住居、集落、街、景観、集落調査、在外研修、生活環境学科

## フィールド調査

地中海といってもそのエリアは広範囲であるため、今回のフィールド調査ではテーマを設けて調査エリアを限定した。

調査エリアとしてまずは、ギリシャの隣国、南イタリアを設定した。このエリアはギリシャの古代遺跡が今でも残る地域が多く、古代ギリシャの影響が色濃く残っている地域である。加えて中性のビザンツ、イスラーム、そしてノルマン、さらにはフランスやスペインの支配下で、多様な文化が培われた。

次にイタリアの隣にある地中海沿岸のスペインのアンダルシア地域である。この地域はイスラームの文化を色濃く受け継ぐ個性豊かな住居・集落・街が点在している。

また、地中海エリアでイスラーム文化の影響を強く受けているモロッコやトルコにも足を運んだ。

地中海沿岸には海を媒介に多くの民族が重なり、それぞれの地域の気候風土や独自の地形的立地条件をいかした生活空間が形成されている。海沿いや丘陵にへばりつくように形成された集落や、イスラーム文化圏では水を集めて豊かなオアシスに街が形成された。このように地中海沿岸の多様で豊かな生活空間のフィールド調査の一部を紹介したい。

### 1. 南イタリア

#### 1-1 アマルフィ

急峻なアマルフィ海岸に面して形成された街で、世界遺産にも登録されている。先行研究によると、中世の早い時期に羅針盤を使った航海術を発達させ、海洋都市国家として名をはせたとされる。また、街の一面にはもともとギリシャ人のコミュニティとして生まれたという12世紀末の古い建築複合体がある。

私は近隣の港町であるサレルノの港から船で上陸した。背後には険しい丘陵（崖に近い）が迫る溪谷の極めて限定された範囲に、斜面にへばりつくように住居群が密集して美しく個性的な街が形成されていた。

船着き場から街を歩くと随所にイスラーム文化の影響を受けた建築物を目にすることができる。これはかつてオリエントや北アフリカのイスラーム世界との交易が盛んであった歴史の痕跡が刻まれているといえる。谷に形成された中央の目抜き通り

を背後の丘陵に向かってさらに歩いていくと、美しいレモン畑が段々に形成されていた。目抜き通りの両脇の斜面には折り重なるように住居が密集している。各住居に通じる道は極めて急で狭い。さらに階段を上っていくとここにも段々のレモン畑が姿を現し、視界の開けた場所から臨む景色は素晴らしく美しいものであった

この高台から住民の行動を観察していると、集落ではかなりの高齢化が進んでいるようで、高齢者がこの急な階段を日々行き来している光景は想像を絶するものであった。日本と同様に高齢化が顕著な現代のイタリアにおいて、極めて美しくまた厳



図3 アマルフィの全景（撮影：鎌田誠史）



図4 アマルフィのレモン畑（撮影：鎌田誠史）



図2 アマルフィの美しい街並み景観（撮影：鎌田誠史）



図5 アマルフィの教会（撮影：鎌田誠史）



しいアマルフィの生活空間は将来的にどのような道をたどるのだろうか。そのようなことを高台の心地よい海風に吹かれながらふと考えた。

## 1-2 マテラ

マテラは南イタリアで有数の洞窟都市で、世界遺産にも登録されている。先行研究によると、地中海の沿岸には、トルコからスペインまで、先史以来、いろいろな時代に洞窟に住む文化が存在し、その頂点に立つともいえる洞窟都市のひとつがマテラとされる。溪谷に開く斜面上の台地（崖）や谷にびっしりと洞窟住居群がひしめき合っている。この岩場の居住地をサッソと呼び複数はサッシとなる。このマテラのサッシはトゥフォと呼ばれる凝灰岩で、比較的やわらかな石質のため、最初は自然の浸食で生まれた洞穴に、住み始めてやがては崖のいたるところに洞窟住居を掘り抜き、高密度な住居群が形成されたとのことである。

私はこの地形や自然条件とみごとに一体化したマテラの洞窟住居群の迫力にただただ圧倒された。先行研究によると、サッシにおける本格的な居住を決定的にしたものは、ギリシャからの多くの修道僧の移住だったとされる。彼らはイスラーム教徒の侵入や偶像破壊主義者からの迫害を逃れて、8, 9世紀にこの地にたどり着き、そして、先に述べたように自然の洞穴を利用、また、人工的に掘りながら、修道院をつくり、宗教活動を



図6 マテラの全景（撮影：鎌田誠史）



図7 マテラの夜景（撮影：鎌田誠史）



図8 マテラの住居（撮影：鎌田誠史）

展開したとされ、この地にもギリシャの影響が色濃く及んでいたことに大変驚いた。

また、幸運にも洞窟住居をコンバージョンしたホテルに宿泊することができた。室内は薄暗く、開口部も外側に面した小さい窓がしか所だけの小さな空間であったが、室温は心地よく室外の音が遮断された独特の静けさで非常に快適であった。聞けばこのマテラのサッシ地区は、かつて不衛生で荒廃し、廃墟となっていたが、マテラ市が再生のための国際コンペを行って、修復がなされて見事に復活したそうで、現在では観光客や移住者が後を絶たないとのことである。車も入れない近代都市とは程遠いこの都市の再生のプロセスは非常に興味深く、今後のまちの変化が大変楽しみである。

## 1-3 アルベロベッロ

南イタリアでも特に有名な住居形式がある。それがトゥルッリの民家である。トゥルッリとは、石灰岩を板状に加工したものを重ねて円錐形ドームのとんがり屋根の構造物のことで、オリーブ畑が広がる美しい田園にいたるところで目にすることができる。この特徴的なとんがり屋根はモルタルや漆喰などを使わずに持ち送り構造で積み上げて作っただけの簡素なものであるが、先行研究によると、古い時代、農民は贅沢な建造物をつくることを禁じられていて、そこで、領主が見回りにくくこと



図9 アルベロベッロの全景（撮影：鎌田誠史）



になっても、その直前に一夜にして壊すことができるように、こうした空積みの工法による民家が考案されたとされる。

トゥルッリは本来、田園に独立して立つ素朴な民家の形式とされるが、それが密集して街のような姿をみせるのが、世界的にも有名なアルベロベッロである。このアルベロベッロは15世紀の後半に、土地の開墾を目的に農民を集めて居住したことが起源と言われている。先行研究によると、トゥルッリの起源説のひとつに、メソポタミアあるいは北アフリカからクレタ、ギリシャを経て南イタリアに伝わったとする説が有力で、語源的にも<trullo>はギリシア語でドームをもつ円形の建物を表す<tholas>に由来するとされる。



図10 アルベロベッロの全景（撮影：鎌田誠史）



図11 トウルッリの屋根（撮影：鎌田誠史）



図12 屋根の詳細（撮影：鎌田誠史）



図13 木陰休憩スペース（撮影：鎌田誠史）



図14 トウルッリの断面模型（撮影：鎌田誠史）

アルベロベッロは、居住域の周りに広大な田園が広がる緩やかな傾斜を持つ場所に立地していて、集落全体を見渡せる場所からみた密集するトゥルッリ民家たちは、他のどこにもない個性的で愛らしい集落景観を形づくっていた。

集落には観光客であふれかえっていて、とくに目抜き通り沿いの民家などはお土産店やホテルが立ち並び、にぎわいを見せていた。中心部から少し外れると往時から続く静かでプリミティブな暮らしを見ることができた。

集落の入口には広場があり、そこには特徴的な形態に剪定された大きな木陰のある休憩スペースが置かれている。暑かったこともあり、そこで休憩していると地元の高齢者と思われる方々がおしゃべりに花を咲かせていたり、ペットの散歩で犬と休憩していたり、小さい子供連れの家族がお弁当を食べていたり、と地元住民と観光客の素敵な交流の場にもなっていた。

#### 1-4 オストゥーニ

南イタリアの要塞都市オストゥーニは、アドリア海を見下ろす丘の斜面に、石灰で塗られた白い建物が重なり合って立ち並び、「白い迷宮のまち」と呼ばれている。山の頂点に宗教施設を置き、その周りに居住域を配置する形態は、ギリシャで見たカストロ（イタリア人によって築かれた要塞都市）と同じであり、そのルーツを自身の目で確認することができた。オストゥーニ（Ostuni）という呼び方は、ギリシャ語のアストゥーネ



オン（Astu-neon）に由来し、ギリシャ語での意味は「新しい町」を意味するという。しかし、オストゥーニは旧跡時代の遺跡が発見されており、古代よりこの土地に人々の暮らしがあったようであるが、侵攻によって破壊され、その後、再建されたため「新しい町」という呼び名が付いたのかもしれない。いずれにせよ南イタリアの都市形成において、ギリシャの影響が広範囲に及んでいることを確認することができたことは、大きな成果であった。

旧市街は石灰乳の石灰で、毎年白く塗り替えているそうで、これが「白い迷宮のまち」と呼ばれる所以であると考えられる。街のある、プーリア州の土地は石灰の地層でできており、昔から石灰を砕いてセメントのようにして壁に塗っていたとのことである。石灰分には消毒・殺菌作用があるといわれており、また、夏の暑さの日差し対策としての効果も期待される。実際に旧市街では壁を塗り替えている住民の姿があった。

## 2. アンダルシア地方

### 2-1 グラナダ

地中海沿岸のヨーロッパ地域において、イスラーム文化の影響を無視することはできない。とくに、スペインの地中海沿岸のアンダルシア地方には、イスラーム文化の影響が今でも色濃く残る街並みを目にすることができる。先行研究によると、中世のある段階まで、ビザンツやアラブの東方地域のほうが、西欧よりもずっと高い文化を誇ったとされ、とくに、古代ギリシャ、ローマを受け継いだアラブ世界は、高度な科学・技術、思

想や文化を誇っていたとされている。キリスト教の征服運動である、レコンキスタの完成する15世紀までの約800年近くものあいだ、アンダルシアは長らくアラブ支配のもとで文化を繁栄させたとのことである。

中でも、グラナダにあるアルハンブラ宮殿は見事であった。この宮殿は優美な装飾と美しい中庭を持つ、王宮として知られているが、実は馬の背のような緑豊かな台地上にある城塞の性質も備えており、その中に住宅、官庁、軍隊、厩舎、モスク、学校、浴場、墓地、庭園といった様々な施設を備えていた。現代に残る大部分は、イベリア半島（アル＝アンダルス）最後のイスラーム王朝・ナスル朝の時代の建築とされ、初代ムハンマ



図 17 アルハンブラ宮殿の回廊（撮影：鎌田誠史）



図 15 グラナダの旧市街の街並み（撮影：鎌田誠史）



図 16 グラナダの市街の街並み（撮影：鎌田誠史）

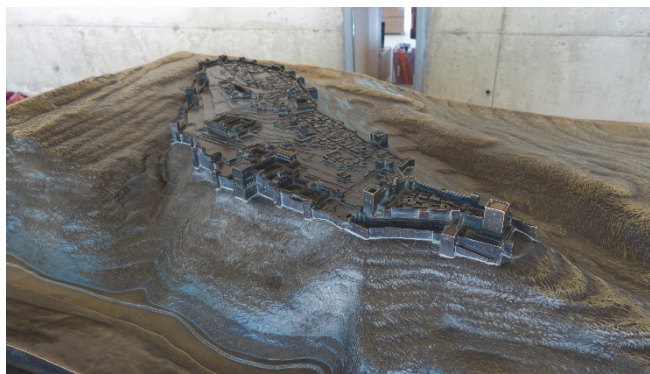


図 18 アルハンブラ宮殿の模型（撮影：鎌田誠史）



ド1世が建築に着手し、その後のムスリム政権下で増築された。スルタン（王）の居所であるとともに、数千人が居住する城塞都市でもあったとされる。

ヨーロッパには中世から城が多く築かれたが、アラブ・イスラームはさらに高度な築城技術を有していたことがわかる非常に貴重な建造物である。

また、宮殿は往時から水を遠くから引いて、今でも豊富な水によって現代では楽園のような様相を呈している。このような宮殿の空間体験は生涯忘れられない経験となった。



図19 アルハンブラ宮殿の中庭（撮影：鎌田誠史）

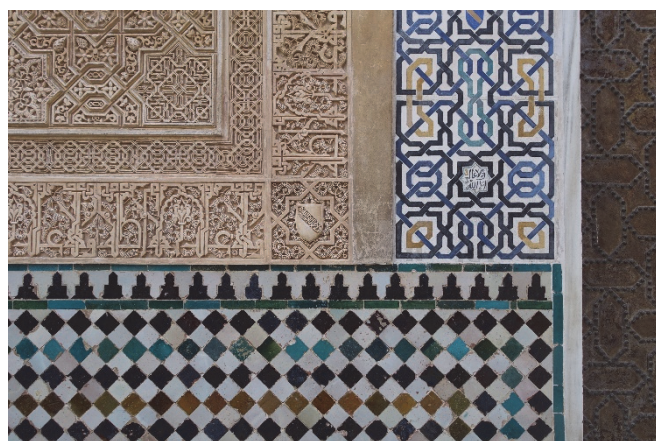


図20 アルハンブラ宮殿の装飾（撮影：鎌田誠史）



図21 アルハンブラ宮殿の内部（撮影：鎌田誠史）

## 2-2 セビーリャ

旧市街にある大モスクは、レコンキスタ後にキリスト教のカテドラル（大聖堂）に建て替えられたが、その鐘楼はミナレット（1日5回の礼拝が義務づけられたムスリムに対し、その礼拝時間を呼びかける「アザーン」を行なうための場所）を継承・改造したものであり、中庭にもモスク時代の形態が受け継がれているとされ、実際の旧大モスクは圧巻の存在感であった。

旧市街には、「メトロポール・パラソル」という複雑な木造屋根の巨大な施設があり、ミュージアムや市場が併設されていた。なお、この施設があまりに巨大であったため、個人的には旧市街のスケール感との違いに戸惑った。市場では新鮮な魚介類や熟成されたハムなどが売られていた。



図22 カテドラル（撮影：鎌田誠史）



図23 メトロポール・パラソル（撮影：鎌田誠史）

## 3. モロッコ

### 3-1 マラケシュ

地中海沿岸のヨーロッパ地域におけるイスラーム文化にすっかり魅了された私は、アンダルシア地方から地中海を望むその先にある北アフリカ・モロッコに渡った。モロッコは、先住民ベルベルの文化と融合した地域となっている。

まず、スペインから空路でマラケシュに向かった。マラケシュは険しいアトラス山脈の北側の麓に広がる平野にできたオア





図24 スーク（市場）の風景（撮影：鎌田誠史）

シス都市で、東側にはサハラ砂漠、西側には北大西洋が位置する。

先行研究によると、ベルベル人の王朝のもとで1062年に建設され、旧市街の入口には、ジャマ・エル・フナ広場があり、多くの出店や見世物で昼夜問わず観光客でにぎわっている。

旧市街に入ると街路は狭く複雑で、中庭型の住居が密集し、折れ曲がった街路や袋小路をもつ複雑に入り組んだ迷路のような空間構成となっている。その中でもとくに賑わいを見せるのが、スークと呼ばれる市場である。スークのある街路には木や葦簀などの屋根が架かり、アーケードになっている。アーケードは光を適度に入れながらアフリカの厳しい日射を遮って快適な環境を生み出している。スークには店舗がひしめき合い、貴金属や香料、食品などがところ狭しと並んでいる。旧市街の中心部を占めるこうしたスークは、日本の商店街のように上部に居住スペースなどを持っておらず、基本的に人は住まないようである。

スークのあるようなやや大きな（といっても狭い）路地から少し外れると、より狭く、より複雑な街区構成となり、住宅群が姿を現す。スークの喧騒とは正反対に静かな空間となっている点が特徴的である。イスラーム社会では、近隣のコミュニティのまとまりが重要とされ、また、家族が非常に重要な単位で



図25 居住区の風景（撮影：鎌田誠史）

あり、コーランにも家族の私的領域の重要性が説かれているようである。したがって、住宅は極めて閉鎖的であり、プライバシーが重視されている。

旧市街は、入口の大きな広場から始まり、スークの商業空間、そして静寂の居住空間に至る、パブリックとプライベートな空間の明確なヒエラルキーが存在し、それらがすなわち都市構造として空間化されている点が非常に興味深い。

なお、旧市街にはモスクが点在しており、神聖な空間が展開しているが、イスラーム教徒以外の入場を厳しく制限しているため、中の様子はわからなかった。

### 3-2 マラケシュ及びワルザザートの周辺

地中海沿岸近くに連なるアトラス山脈の南部に位置するベルベル人の村を訪ねた。急峻な崖に形成されたカスバと呼ばれる居住域には住居が崖にへばりつくように幾重も折り重なりながら、美しい集落景観を形成している。私が訪れた村では丁度、羊まつりが開催されていた。村の若者数名が羊の皮でできた被り物を着て、鞭を持ちながら村中を練り歩き、村人を見つけては持っている鞭で叩くという祭りであった。とくに男性が叩かれるそうで、叩かれた人は幸運がもたらされるそうだが、あま





図 26 ベルベル人の集落 (撮影：鎌田誠史)

りに痛そうで村人が逃げまどっていたのもうなずけた。非常にプリミティブでユニークな祭りを見ることができた。

次に、地中海沿岸近くに連なるアトラス山脈の南部に位置するワルザガートを訪問した。マラケシュからアトラス山脈を越える、あるいはサハラ砂漠に抜ける幹線道路の経路上に位置している。

その近郊には、世界遺産にも登録されている、アイット＝ベン＝ハドゥの集落がある。ハドゥー族が築いたこの集落は、独立した集落ゆえに、盗賊などの掠奪から身を守るため、城砦に匹敵する構造になっている。住居は日干し煉瓦で作られ、それ



図 27 アイット＝ベン＝ハドゥの集落 (撮影：鎌田誠史)



図 28 日干し煉瓦 (撮影：鎌田誠史)

ゆえ、集落は大地と完全に一体化しており、人工物と自然との境目がわからない、非常に個性的なカスバとなっている。

集落の住民に話を聞くと、プリミティブな住居形式のため、現代生活には合わないが、住民は誇りをもって住み続けているとのことであった。また、映画のロケ地としても世界的に有名な場所のため、しばしば映画の撮影スタッフの仕事もあるそうで、他にも観光案内などをしながら住民はゆったりとした生活を送っているとのことであった。

### 3-3 フェズ

フェズの旧市街は、マラケシュよりもさらに複雑な街路構成となっており、世界遺産に登録されている。フェズ市内のメデynaと呼ばれる旧市街は、9世紀から始まった、フェズ・エル・バリと呼ばれる地区と、13世紀に建設された、フェズ・エル・ジェディドと呼ばれる地区の大きく2つの地域で構成されている。旧市街の周りには丘陵に囲まれており、旧市街の中央を貫いてフェズ川が流れている。フェズ川を底として両岸が競りあがるすり鉢上の構造をしており、岸に建てられた建物は底の部分に近づくほど古い歴史をもつものが多くなるとされる。水の豊富な地域のため、いたるところに古い水場がある。

旧市街は、分厚い市壁で囲まれていて、8つの門が設けられている。街区構成は極めて複雑で、道は曲がりくねっている上、高低差があり、見通しも悪く迷路のようである。私もこの迷路



図 29 フェズの旧市街全景 (撮影：鎌田誠史)



図 30 人懐っこい子供たち (撮影：鎌田誠史)





図 31 滞在したリヤド（撮影：鎌田誠史）

に何度も迷っては、しばしば目的の場所にたどり着けず、同じ場所をぐるぐると迷った。地区内のところどころに小さなモスクやハンマーム（公共浴場）、小規模の店舗がまとまって配置され、いくつかの主要街路は道の両側に商店が並ぶスーク（市場）となっている。

住宅のファサードはほぼ装飾はなく、堅牢な扉のみが街路に面していることが多い。住宅の多くが中庭を有しており、上部には可動式の屋根が架けられたりして、室内空間として積極的に利用されている例が多い。高密度な居住域のなかで快適な居住環境を獲得するための知恵だといえよう。

このような邸宅を宿としてコンバージョンされている例が多く、このような宿をリヤドと呼ぶ。私も古い邸宅を改装したリヤドに滞在したが、宿主が示した壁に刻まれた建設年を見て大変驚いた。なんと、1327年に建てられており、約700年前（2024年現在）の邸宅ということになる。内部空間は極めて美しく、また快適であった。とくに中庭は筆舌に尽くしがたい美しさであった。

フィールド調査で街を歩くと住民のほとんどが声をかけられるほど人懐っこく、日本人はもとよりアジア人がほとんどいないこともあり、興味を持って接してくれるのだが、中には勝手に観光案内をはじめてチップを求める住民もいた。子供たちは満面の笑顔と簡単な英語で話しかけてくれることが多く、好印象であった。

## 4. トルコ

### 4-1 イスタンブール

ギリシャのエゲ海に始まり、イタリア、スペイン、モロッコと地中海沿岸の居住文化を見てきたが、最後は地中海の東端に位置するトルコを巡ってこの報告を終えたい。まずはトルコ最大の都市として世界中から人々が集まり、多彩な文化が混ざり合う歴史ある大都市であるイスタンブールである。

先行研究によると、立地的に、アジアとヨーロッパにまたがるこの地は、その地理的・地政学的な特徴から、紀元前の古代よりギリシャの植民都市として知られ、その後、ビザンチン帝国の首都であるコンスタンティノープルとして、ギリシャ文化とキリスト教の中心地となったとされる。さらにその後、衰退とともにムスリムが大挙して移住したことで、都市全体がイスラーム文化に塗り替えられて、現在に至るとのことである。

イスタンブールを二分するボスボラス海峡によって、アジアとヨーロッパに分かれている特異な地理的な条件の下、貿易や文化交流が盛んに行われている。

イスタンブールの個性的な都市構造の他に私の専門分野のひとつである建築学的な観点からみて、イスラーム建築群の存在を無視することはできない。世界的にも有名なアヤ・ソフィアはビザンチン建築の最高傑作と言われている。キリスト教の礼



図 32 イスタンブールの都市景観と海峡（撮影：鎌田誠史）

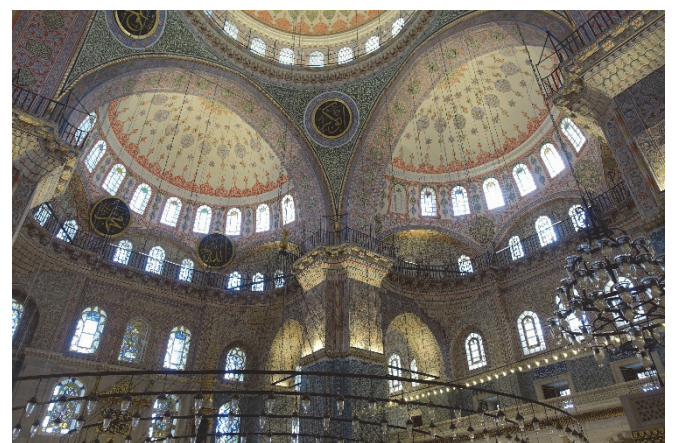


図 33 モスク内観（撮影：鎌田誠史）





図34 アヤ・ソフィアのスケッチ（撮影：鎌田誠史）

拝堂として建設されたのちに、突如としてイスラームのモスクとなる歴史的経緯も面白く大変興味深い。その他、イスタンブールを代表するスレイマニエ・ジャーミーでは、Suleymaniye Cultural Info Centerのボランティア案内の方に非常に丁寧な説明をいただいた。現役の有名なモスクの内部空間の説明を受けながら見学できたことは非常に良い経験であった。

なお、滞在の拠点はタルラバシュ（Tarlabaşı）地区を選んだ。イスタンブールのスラム街ともいわれている多少危険な地区とされているが、街の人々は気さくで優しく貧しくもたくましく生活しているようであった。私の通ったスーパーマーケットは、モスクの1階にあり、上階には公民館のような施設も組み込まれていて、複合的な機能を持った宗教施設であった。モスク前の広場ではフリーマーケットが開かれていたり、食堂では地域の人々に交じってトルコ料理を食べたり、イスラームの生活にどっぷりと浸ることができた。

#### 4-2 カップパドキア

カップパドキアは、トルコの内陸部にある歴史的地域で、ギョレメ地区は世界遺産にも登録されている。キノコ状の岩に代表される奇岩群の景観や岩をくり抜いた住宅、地下に掘り下げられた地下都市など様々な特徴を持つ地域である。カップパドキアは、古代オリエントの王国ヒッタイトの中心地として栄え、6～9世紀には迫害から逃れたキリスト教徒が移住し、岩石を彫り削って地下都市や教会を造り上げたとされている。



図35 カップパドキアの全景（撮影：鎌田誠史）

私は有名な観光地を避け、その周辺の名もなき集落を訪ね歩いた。集落の中心には必ずモスクが鎮座して、その周りに人々が集まり、小さいながらも市が開かれている。人々は岩をくり抜き自然と同化しながら生活し、信仰してきた様子をうかがい知ることができた。

私はレンタカーで可能な限りカップパドキアの広大な自然を駆け巡り、集落を訪ねた。どこまでも続く奇岩の壮大で美しい風景を私は生涯忘れることはないだろう。

#### 4-3 フェティエ

トルコへの入国はギリシャのロードス島からフェリーでフェティエ港に入港した。海からの入国も特に問題なくスムーズであった。この地域には、ギリシャ正教会のキリスト教徒が住んでいた村が、20世紀初頭まで3000軒もの家が立ち並んでいたが、独立戦争後の住民交換により、村がそのまま残されたカラキョイという村がある。エーゲ海の港町の雰囲気とトルコの文化を感じることができた。

#### 5. おわりに

在外研修報告の続報として、地中海沿岸や一部内陸部の特徴的な地域をピックアップして巡った報告を行った。フェルナン・ブローデルの著書、『地中海Ⅰ 環境の役割』の序文には、「地中海は<ひとつ>の海ではなく、「海の複合体」なのだ。いろいろな島があり、いろいろな半島で切断され、さまざまな海岸に囲まれた海から成っている。その生活は地上とも関わっているし、海のポエジーは半分以上が農村的であり、地中海の船乗りたちは既設によっては農民である。」と記されている。

今回の巡見では、紙面の都合で掲載していない国も含めると、ギリシャ、イタリア、フランス、スペイン、モロッコ、トルコから地中海を見ることができた。国や地形的立地条件の違いに加えて、重層的な歴史のレイヤーの多様性、歴史と共に折り重なり塗り替えられる宗教と生活空間の変容など、複雑に絡み合いながら地中海が、まさしく「海の複合体」として存在していることを垣間見ることができた。もちろんごく表面的な理解に過ぎないが、本在外研修の目的である、エーゲ海・キクラデス諸島の聖なる景観と島嶼文化を考える上で、大変重要な経験であった。

今後は、キクラデス諸島と南西諸島の比較を中心に研究を進めていく予定であるが、究極の目標としては、南西諸島を含む東アジア、東南アジア海域と地中海地域の比較研究につなげていきたいと考えている。

#### 注及び参考文献

- 1) 陣内秀信: 地中海世界の都市と住居, 山川出版社, 2007
- 2) 陣内秀信: 南イタリアへ! 地中海都市と文化の旅, 講談社, 1999
- 3) フェルナン・ブローデル: 地中海Ⅰ 環境の役割, 藤原書店, 2004
- 4) 南泰裕「トルコの建築事情」(『建築ジャーナル』2015年7月号, 建築ジャーナル社)